

神獄塔　メアリスケルター　AnotherFinale　外伝短編集

謎のコーラX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはいわゆる監獄塔メアリスケルターFinaléが待ちきれ無かった人の設定、もとい短編集です（・ω・）

目次

ある道化師の話	1
2話 ある宗教と都市の話	6

ある道化師の話

・・・そこはごく平凡な村と言っている、慎ましやかな生活を送り、平和で、のどかな日々が続いている、ただ、この世界では当然のことながら怪物、通称メルヒエンが出没している。

「かー、どうしたもんかのお」

村長の家にて、その村の村長は悩んでいた、近くの湖がある場所で、メルヒエンが大量に群れを成していた、この村には井戸は既に枯れ果て、水は湖でしか取れない、雨水などでなんとか代用してきたが、それも限界、村長は村人を集め、策を練ることにしたが、一時間してもまともな解決策はない。

「なあ、けっせんとし血戦都市になら」

「バカ野郎！、そんな雇う金が何処にあるって言うんだ！」

血戦都市、正式名血式少年少女戦線都市、血式少女と少年が残された人々を集めた世界最大の都市、何十名かの血式少年少女を都市を治め、いくらかのお金で都市外のメルヒエンを掃討している、お金は医療 死んだ時の保険、武器の修理費に使われるため、無料では言いにくい。

「でも、どうすればいいんだよ」

村人達が嘆いていると、村長の家のドアにノックがかかる。

「誰だ？」

村長がドアを開けると、そこには色とりどりの布を使った服を着た、褐色肌で銀髪の端正な顔立ちの二十代ほどの男がそこにいた、男は爽やかな笑顔で会釈をする。

「どうもどうも、ワレ我の名前は、そうだな、道化師とでも呼んでくれ、我はしがらない旅人でね、ふとこの村に足を運んだ次第だ」

「ど、道化師さまが何の用で来た」

村長は警戒した面持ちだ、道化師は笑顔を崩さず言葉を続ける。

「一つ、ご契約を、もし、我があのメルヒエン達をいなくしたら、報酬をお願いしたいのです」

「ほ、報酬？」

「はい、そうだなあ、百万でいかがでしょう?」

「そ、そんな大金払えん!」

「さようか、では50万ならどうかかな?」

「む、むう、少し待て」

村長は村人達を話し合う、道化師に聞こえないようにコソコソと。

「なあ、あの銀髪のアんちゃん怪しすぎないか?、本当にやってくれるともわからないのに」

「だけどよお、50万くらいならなんとか払えるんじゃないか?、村のほとんどのお金を失うことになるが」

村人達は悩む、50万はそれなりの金額だが都市の少年少女を雇う費用はその倍はある、本来なら安い買い物だが。

「なに、もしもの時は反故すればよい、口約束だしの」

村長は欲をかいいた、かいてしまった。

「用心深いなあ、疑心暗鬼だなあ、フフ」

村人達が呟く裏で、道化師もまた小さな声でそう呟く。

5分後、村長は外で待っていた道化師のところに戻ってくる。

「良いだろう、それで手を打とう」

「ふふ、ありがとう村長殿、ではいってくる」

数分で道化師はメルヒエンが屯してる湖に着く、それなりに離れた位置で止まり、メルヒエン達が気づかれなくらいの、その少し離れた場所から村人の一人が監視していた。本当にメルヒエンをいなくならせてくれるのか見ているのだ。

「・・・さて」

道化師は懐から黒い笛を取り出す、それに口をつけて、音を鳴らした。

その音は美しく、村人は心が安らぐ感覚がする、しかしメルヒエン達の様子はおかしい、頭らしい場所を抑えて苦しみ悶え、次の瞬間、湖に一齐に飛び込みはじめたのだ。

「な——なんなんだ!?!」

村人は急いで村のほうに走った、その背中を道化師に見られていることに気づかず。

「ああ、賢明だね、臆病だね」

再び数分後、歩いて戻ってきた道化師は、武器を構える村人達を見た。

「おや、これはどう言うことかな」

「貴様！、メルヒエンを操ったそうではないか！、そのような怪しい輩を村に入れることなど出来ん！」

村長がそう言うのと、道化師の顔が一瞬真顔になった、すぐに笑顔になり、瞬きの間なので気づいた様子の者はいない。

「・・・いやはや、そのようなことに成るとは、つまりは報酬は払わな
いってことでいいか？」

「ふん！、怪しい者に払う金など」

「わかった、それでは村の皆さん、さようなら」

村長の言葉を遮り、道化師はそれだけ言うのと、村から去った。

「な、なんだったんだ、あの男は」

「な、なあ、本当に良かったのかな？」

監視していた男がそのようなことを言う。

「おい！お前、今更後悔してるのか！、これは村の皆が決めたことだ
ろ」

「だ、だけどよお、なんか怖いんだ、あいつ、何かやらかしそうで」

・・・その言葉は、明日わかることになった。

「た、大変だ！」

村人が村長の家のドアを開き、声を荒げて言った、汗も多く、齒も
ガチガチと鳴らし恐怖している。

「な、何があつたんじや！」

「こ、子供が、子供が何処にもいねえんだ！」

「な、なんじやと!？」

この村の子供の数は50人、それほどの数が一夜でいなくなるのは
普通ではない、村の大人の若い男達100人は辺りを散策した、犯人
はわかっている、あの道化師、メルヒエンを操った男だ、村人達は見
つけたら殺してやろうと思いつながら、村の近くを探した、近くに
いるはずだと、道化師を監視していた男が言い、そして、不自然に岩で閉

じられた場所を発見する。

「おいー、あれ持ってこい」

村人達はもしもの時、メルヒエンが襲ってきた用のための爆弾を岩にセツトする、導火線を付けて離れ、爆発する。

そこには洞窟が存在し、ここだと思い、村人達は一人を残して入っていった。

「・・・やっぱり、やっぱりそうだ、子供の頃に本で見た・・・」

そう言って、その村人は恐怖で顔を引きつらせながら走ってこの場から逃げた。

入っていった村人達は松明で照らしながら奥に進んでいった、最奥までたどり着くと。

「——な！、なんだこれは!?!」

男達が見たのは、ピンク色に光る、池だった、しかし、男達はよく知ってる、これは、

「め、メルヒエンの血がこんなに!?!、でも子供は何処にも」

「おや、もう来てしまったのか、案外早かったね、誰か気づいたみたいかな、ま、いいか」

そう言って、道化師が上から降りてくる、何時もの笑顔を浮かべて。

「き、貴様！、子供達を何処にやった!?!」

「ん？、そうだね・・・ふふ、見ての通りハズレだけどうする?」

「殺す!」

男の一人が道化師に農具を振り下ろす。

「勇敢だね・・・無知だね」

次の瞬間、男の首が何かに切り裂かれ、地面に落ちる。そして身体の断面から大量の血液が飛び散り、道化師を濡らす。

「・・・別に旨くもないんだけどな、人間の血なんて」

「な!?!」

男達は驚く、道化師の背中から6枚の黒い羽が生え、角が生え、目は白から黒に変わり、その姿は悪魔のようでもあり、魔神とでも言うべき姿になっていた。

「この際冥土の土産ってやつで教えておいてやる、我の名前は・・・ハ

「ハーメルンだ」

——数分後、そこには血で染まり、ピンクと赤が混ざった池がそこにはあった。

「あらー、派手にやったねえ、ハーくん」

「・・・お前かドロシー」

ハーメルンのところに、ピンク色の髪と目をした、魔女のような黒い服の少女が突然現れる。

「一つ報告をしにね・・・来るよ、彼女達が」

ハーメルンはそれを聞き、口角を歪ませる。

「はは、マジか、ははは、アハハ!!、ようやくだよ!、ようやく・・・我は完全になれるう!!、アツハハハ!」

そう言つて、ハーメルンと名乗る男は歓喜の声をあげ、洞窟の天井を破壊して、飛び去った

2話 ある宗教と都市の話

夜、満月が空に上る夜、ある聖堂で、1000人はいるであろう人達が月に祈りを捧げていた。

「おつきさまー、おつきさまー、我らの罪を許してください！」

「おつきさまー、おつきさまー、竹取の翁様！、我らの罪は許されるのでしょうか」

「はい、月は如何なる場合でも我らを照らし、見てくださる、さあ、今日は美しき満月の日、共に祈りましょうぞ」

顔を白い布で覆い、顔のついた三日月の真ん中に齒車のようなものがついたシンボルがついた白い服装をしている竹取の翁と呼ばれる者は、天を仰いだ。

白月教、血戦都市の1勢力であり、血式少年少女達が統治する現状に不満を抱き、人による統治を目的としている、空に浮かぶ白く大きな月を崇拜しており、最終目的として月をこの地上に降ろすこととなっている。そして他の都市民からは忌避されている、その理由は明白である。

「・・・ふん、この程度力、そっちはどうだ？」

都市外、豚の耳に両肩に豚の頭を持った男は、最後のメルヒエンを踏み潰すと、兎の耳を生やした女に話しかける。

「3匹の子豚、そなたとわたし、因幡の白兎は上司です、もっと敬いなさいませやがれ、下衆」

因幡の白兎と名乗る女性も飛んでくる虫型メルヒエンをキックの衝撃だけで吹き飛ばし、粉碎する。

「まあわたし一人でこんな低能なメルヒエンなど、いや全てのメルヒエン、ナイトメアなんて、一蹴だかなですが」

「ふむ、さすがオレら月の使徒の総隊長だな、傲慢が服着て歩いているぜ」

「褒め言葉として聞き流そう、さて副隊長、お帰るぞ」

「ハイハイ」

因幡の白兎と3匹の子豚が都市に入ると、忌避の視線を浴びる。

「おい、あれが」

「ああ、ナイトメアを身体に取り込んだっていう月の使徒だ、不気味だぜ」

「早く血式少女達に殺されねえかなあ」

上級月の使徒、もとい血式兵器、ナイトメア・スケルター、本来なら取り込めば擬態化により、自我を破壊され、異形になるが、白月教の研究により、一部の人間のみが適合し、童話のモチーフの部位が現れ、血式少女クラスの力を持てる、ただし、定期的にメルヒエンの血液が必要であり、暴走の危険性などは血式少女達と同様である。

「なあ、どうするヨ、殺す力？」

「やめてくださいやがれ、竹取の翁様に怒られたらどうするつもりだ、民には危害を加えないのが教義に入ってるでしょ」

「わかってるサ、冗談冗談、さ、こんな月の夜ダ、教会に帰るゾ」

「そうですね・・・ところで、先程からこちらを見てるおやつ、今すぐ帰れば何もしないで置いてあげてやる、本当にオヤツになりたいなら向かってこい」

「——ちっ」

何処か遠くからの視線が消えたのを感じた後、因幡の白兎は教会に帰っていった。

彼らの位は一番下に下弦隊、次に上弦隊↓三日月隊↓満月隊と言った感じになっている、それら全てを統括するのが因幡の白兎率いる^{ムーンレベッツ}月兎隊名前は無かったが彼女が独断で付けた。

「ふむ、やはりバレたみたいだね」

血戦都市、本部ビル、最上階 血戦隊長室、そこで先程尾行していた兵士から報告を受けていた。

「す、すみません、まさかあそこまで早くに気づかれるなんて」

報告を受けているのは姿は10代半ばの少女、白く長い髪、麗しき美貌は幼いながらも女神のようであった。

「良いんですよ、ここで嘘をついたなら貴方の子供を拐おうかと思っ
ていましたよ」

なかなか恐ろしいことを笑顔で少女は言った。

「ま、マリア様も冗談を言うんですね」

「マリアチャイルドだ二度と間違えるな」

「ひい！失礼しました！」

鬼の形相となったマリアチャイルドを見て兵士は急いでこの場から出ていった。

「・・・はあ、何故皆マリアと呼ぶのだろう、私などにそのような高名な名前は相応しいとは思えません」

マリアチャイルドは椅子にもたれ掛かり、天井を見やる、これまでこのことを思い出しながら。

「確かー、大多数のメルヒエンやナイトメアを殺し回っていましたがね、そのせいなのか知りませんが人々から敬れてー、カーレンの一言から私が隊長にさせられたなー」

「まあ、あんたが一番強くて頭が回るからな、当然当然よ」

扉を開け、ポニーテールの黒髪の少年が入ってくる。

「牛若丸さんですか、何かごようでも？」

「なに、都庁の近くに監獄塔が地下にあっただろう？、あれがついに開放されたってさ」

マリアチャイルドはそれを聞いて、椅子から立ち上がる。

「なるほどー、それは最重要ですね！」

「ああ、そうだな、とりあえず椅子から降りろまた壊れる」

「あ、すみません」

マリアチャイルドは静静と椅子に座り直す。

「で、何か過去のこと言ってたね、それから血式少年少女戦線として兵士の育成から自らの鍛錬とかで一年経って、千人くらいなった後に、都市作ろうってカーレンが言い出して、10年くらいでここまで来た感じだな」

「その頃は私8歳だったから今は18ですかあ、時が流れるのは早いものですね」

「あんたの時は止まってるようだがな」

「言うな・・・言わないで、気にすることなんだから、そうよ、後一

年くらいすれば伸びるし胸にドーンと」

マリアチャイルドは椅子の上で体育座りになりブツブツと言いだした。牛若丸は何時ものことかと、頭をかきながら、耳元で手を叩いた、その衝撃でわれに帰った。

「うわっ、あ、すみません、私って心が弱いですね」

「そうかな、拙僧から見たらかなり強靱だと思うぞ、いくら批難を浴びても動じないしね」

「ありがとう、さて、そろそろ迎いにいきましょうか、カーレンも拾って」

「そうだな、行こうかマリアチャイルド」

マリアチャイルドはクローゼットから血戦の隊長服、赤と白を基調とした軍服に着換え、というよりマントのように羽織った。

「デカイの予め作ったのに悲しいねマリアチャイルド」

「次言ったら」

「わかってる、さ、行こうか」

「おー」

血式少女 マリアチャイルド。

血染め聖女の異名で恐れられ、人間開放の聖女で親しまれている血戦都市の長、頭も回り、心も強固で、戦闘もこなせる、まさに才色兼備の少女、本人は最初は乗り気では無かったが、今では板についている、性格としては物腰の柔らかいが血式リビドーに嘘をつかせない、つきたくないがあり、嘘をつこうものならその子供を攫う、あるいは都市から追放など非情な面がある、身長を気にしており、威厳がないなど思ってるが他者からは可愛がられ、ある者からは恐れられている。ちなみに年齢は18、好きなのはパン

血式少年 牛若丸。

血戦都市の軍隊長を任されている少年、年齢はマリアチャイルドと同じ18ながら、厳しく、鬼隊長として呼ばれている、強きはマリアチャイルドには劣るが軽業と剣技でメルヒエンやナイトメアを翻弄する、性格は軽薄に見えるが案外真面目でカーレンやマリアチャイルドの暴走を止めるストッパー、二重の意味で